

1 本資料のコンセプト = “現場からの発信型” の学力向上プロジェクト

学校支援課 教育主管

「この子たちがどの程度できているか、気になって仕方がなかったので、とりわけ心配な問題について採点を試してみました。」「例年は2学期始まってから届く結果を分析し、いよいよ指導改善という感じでしたが、この資料ができあがったら、さっそく取り組むことができそうです。」……「学力向上推進会議」での先生方の声です。

4月に実施された「全国学力・学習状況調査」は、子どもの状況をみつめることを通して、教師としての自らの指導を振り返る場であること、また、早い段階から指導改善に取り組むことが大切であることについて、この先生方は高い意識をもってみえると感じました。

この「学力向上推進会議〈企画会〉」は、下図のとおり、小中校長会・市町村教育委員会・小中教科研究会・学力向上推進教師の代表者といった、岐阜県の子どものための学力向上の要となる方々に集まっていたり、年2回開催されます。

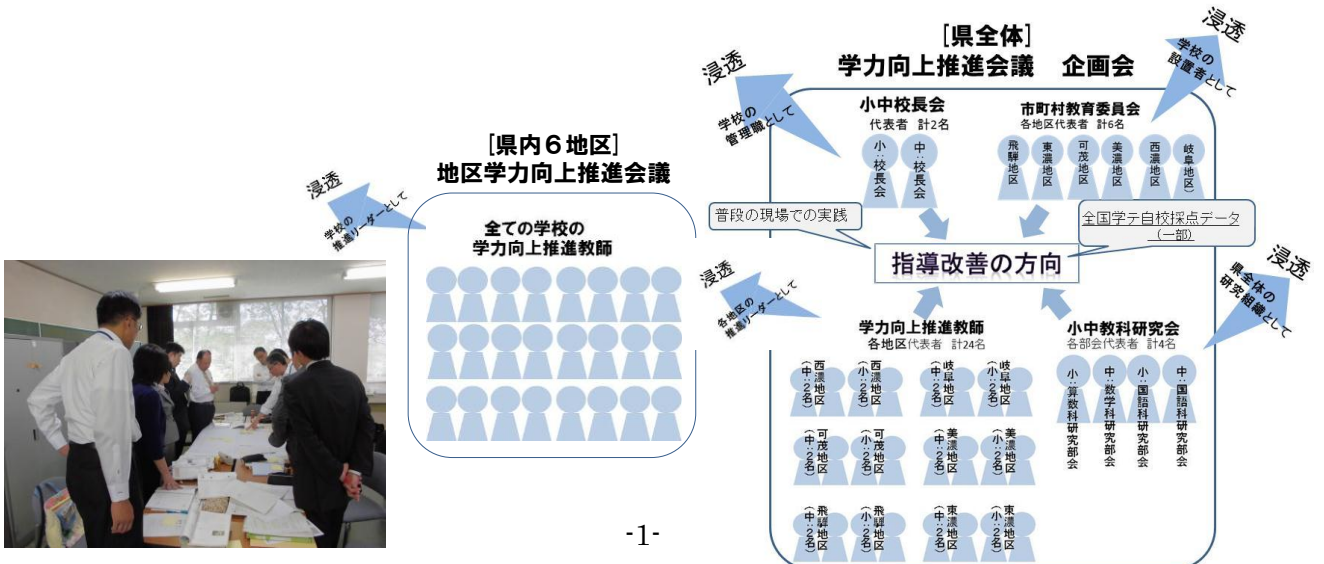
第1回目は、5月11日に開催し、全国調査の自校採点を実施された学校から提供いただいたデータをもとに、また、日頃の学校における指導の現況や、研究会における方向性等を活発に交流いただきながら、「指導改善のための資料」を作成していただきました。

本資料「子どもの目線に立つ2015〈第1弾〉」は、まさに学校現場で子どもたちと向き合う先生方の感覚や課題意識に沿う内容で作成されており、有効に指導改善に生かしていただけるものとなっています。

【本資料の特徴】

1. 本資料は、全国調査の自校採点を実施された学校から提供いただいた実際のデータから見える学力の状況の“傾向”をもとに、学校現場のリーダーとして実践いただいている方々が普段感じてみえる課題、そして工夫ある取組の具体等を持ち寄りながら主体的・協働的に作成に取り組んでいただいた資料です。
2. 1学期後半からすぐにも指導に生かすことができる内容になっています。
3. 今回の学力調査において課題とされた内容について、前段階の学年のどの場面で何をしっかりと押さえることが必要か、小中の接続も考慮しながら系統的に分かるように示されています。
4. どの子にも学習内容が定着できるようにするためには、「一単位時間の中でどのように学習の状況を見届け、どのように指導すればよいのか」、その流れが分かるよう具体的な展開例により示されています。 ←『3つの見届ける』（次頁参照)

※ 小6および中3の学年スタッフだけでなく、また、国語科、算数・数学科、理科のみならず、全学年体制・全教科体制で指導改善に取り組むことが重要です。また、本資料を参考にし、自校の実態に合ったプランを整理していくことも大切です。



全ての先生が全ての授業で

「3つの見届ける」を意識して実践しましょう！

前頁の【本資料の特徴】の「4.」には、実際に「3つの見届ける」を授業の中でどのように行うのかについて例示されています。先生方の「今後の指導改善」の努力が実を結ぶためにも、この「3つの見届ける」をぜひとも意識して実践していきましょう！



ここでは、「小学校：算数」を例に考えてみましょう。

今回の全国調査に、「次の計算をしましょう。」という問題がありました。

「末尾の位の揃っていない小数の減法の計算をすることができるか」をみる問題です。

$$6.79 - 0.8$$



この問題の今回（調査協力校）の正答率は、

73.9%

という結果でした。

これを、皆さんはどのように受け止めるでしょうか。・・・



直近でいえば「平成26年度：岐阜県に児童生徒のおける学習状況調査（1月）」の問題に、

$$2.74 + 1.6$$
 という類似問題があったのを覚えていますか。



この問題の正答率は、当時の5年（⇒今回の対象学年）で

66.2% と低い結果でした。（同じ問題の小4の正答率は、80.7%）

- 小5の「乗法」の学習では「右端を揃えて計算をする方法」を学ぶため、その時点で、前学年（小4）の「加法・減法」で学んだ「小数点で揃えて計算をする方法」と混同してしまうのでは・・・という課題がみえてきました。



- そこで、各学校においては、類似の習熟問題に取り組むなどして、この課題の克服に努めていただきました。その成果が今回の数字に表れてきた、と分析することができますね。



ただし、「7割強だから、まずまず」と受け止めているとしたら、危険です。



指導改善の気運に満ちた学校では、

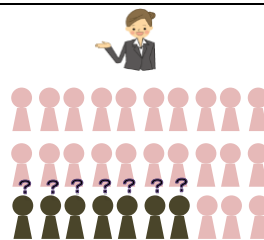
3割弱の子が理解できていない ⇒ 30人学級ならば、まだ7人もの子ができない

という事実を目を向けるでしょう。

そこで、この基礎的・基本的な問題につまずく3割の子たちは、中学校に進学したらどうなるのか・・・という危機意識をもちます。

そうならば、「どうしたらその子たちを0に近づけることができるか」

その対策に、職員全員で向き合い、即指導の改善に取りかかるでしょう。

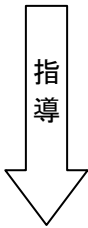


そのためには、「一単位時間」の中で、どのようなことに意識して指導すればよいのでしょうか。

「3つの見届ける」を意識した授業改善の例を右に挙げてみました。昨年度、実際に成果があがった学校の「改善に取り組んだ内容」について述べられていますので、ぜひ参考にしましょう。

1. 授業前

「子どもの実態を見届ける」



前 「あの子がつまずくのでは」という感覚的な予測。
後 前時までの学習状況や、各学力調査等の誤答分析等、客観的なデータをもとにした予測。
 (本時ではどの子がつまずく可能性があるか、そのためにどんな支援策の準備が必要か)

2. 授業中

「学習状況を見届ける」



前 「分かりましたか？」と尋ねて、子どもたちの「ハイ」という反応で、「よし」と判断し次に進む。
後 机間をまわってノートなどをチェックするようになるが、時間にゆとりがない時は、「分かりましたか？」と尋ね、「分かりません」というハンドサインを示した子を把握する。
 (口に出せない子どもの「分らなさ」をキャッチするため、お助けハンドサイン(例)をあらかじめ決めておく。)

【一人で指導する場合】

後 「分かりづらいという子は前においで」と指示を出し、教師が図などを使いながら丁寧に教え、分かったかどうか一人一人に確認する。
 他の子たちは、「チャレンジ問題」等に取り組むようにする。



【少数指導等、複数で指導する場合】

前 「じっくりコース」の中に二つの層があり、教師がどの子にこそ指導すればよいか戸惑っていた。また、教師主導の授業で、一斉と変わらない形態であった。

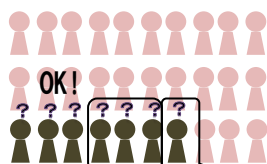
後 「じっくりコース」は、できる限り少人数に絞って編成する。

後 「TTに切り替え、途中まで一斉指導、途中でT2が個別の指導が必要な子を取り出して指導する。」

後 各コースの略案や教材等を「学校の共有フォルダ」に残し、人事異動などで教師がかわっても、誰でも指導できるようにした。

3. 授業終末

「定着状況を見届ける」



「この時間に、私はこのことを学習した、このことができるようになった」と確認できる場をしっかりと保障する。

(例：ノートへの記述、確認問題への取組等)

その際、

前 「まとめの視点が曖昧」「どの子も一律の問題」
後 「キーワードを示して記述」「習熟の度合に合った問題」
 ※ 順番に机間をまわるのではなく、意図性をもってまわる。

後 どうしても理解できずに終わった子については、
 ⇒ できれば、休み時間や放課後等、その日のうちに指導しきる。
 ⇒ そのための時間的ゆとりがない場合は、授業後に記録を残し、長期休業中に指導するなど、いつ指導するかの見通しをしっかりとつ。
 教師の指導・援助によって何とか理解できた子については、
 ⇒ 「確かめ問題」等、家庭で取り組めるものを示し、翌日にチェックする。

【授業後】

後 関連する学習場面(左の事例でいえば5学年で「乗法」を学ぶ場面)で、本時に学習した「加法・減法」の計算式も提示し、双方を比較しながら計算の仕方の違いを確認する。「どういう指導をすればどの子も理解できるようになるか」をチームで検討する。

